

## 救世軍における「恵の座」

立石真崇

### I. 救世軍 The Salvation Army と恵の座<sup>1</sup> the mercy seat

「救世軍 The Salvation Army」は、19世紀後半のイギリスにおいて、元メソジスト牧師であったウィリアム・ブース William Booth (1829–1912年)が東ロンドンのスラム街伝道を行ったことから誕生した教派である。1865年の創設当初は神学的立場も様々な人々が参加する超教派的な伝道運動であったが、ウェスレアン・メソジストの神学的立場また軍隊に倣った中央集権組織の採用によって、実質的に一つの教派として形成されていく。「キリスト教リバイバル協会 the Christian Revival Association」(1865年)、「東ロンドン・キリスト教伝道会 East London Christian Mission」(1867年)、「キリスト教伝道会 The Christian Mission」(1875年)といった複数の名称を経て、最終的に1878年、「救世軍」という名称を掲げるに至った<sup>2</sup>。さらに1890年には、『最暗黒の英国とその出路 The Darkest England and the Way Out』を出版し、伝道に合わせて社会事業に対しても積極的に取り組む姿勢を発表した。以降、「心は神に、手は人に A Heart to God, A Hand to Man」を標語として伝道と

<sup>1</sup> "the mercy seat"の訳語としては「恵みの座」が一般的であるが、日本の救世軍では「恵の座」を公式の表記としている。これは慣例的に使用してきた経緯によるものであり、表記の違い自身は何らかの神学的相違を表すものではない。

<sup>2</sup> Rightmire, R.D., *Sacraments and the Salvation Army: Pneumatological Foundations*, (Studies in Evangelicalism, No.10), The Scarecrow Press, Metuchen, NJ, 1990, p.20f.

奉仕に携わり、現在は世界 111ヶ国で活動している<sup>3</sup>。

救世軍には信仰および実践に関して、他教派のそれと比べた時にいくつかの特色が見出される。軍隊式の組織や呼称、制服、救世軍の旗や紋章等のシンボル、禁酒禁煙を義務とするといった生活規範、救いに続く聖潔(きよめ、聖化)を強調する教理、洗礼と聖餐の sacrament に関して(それらが象徴している霊的意義を認めるものの)儀式としては執り行わない立場等である。そして、今回取り上げる「恵の座 the mercy seat」もその一つに数えることができる。救世軍の恵の座は、公式には「人が救いや聖潔を求めるために、あるいは神の御心や奉仕に対して特別に献身するために、ひざまずいて祈ることができるように備え付けられた台座」であって、「神が和解と贖いをもって臨在されることを思い起こさせるような、焦点となる場所として、通常は救世軍の会堂の説教壇と主要な空間〔筆者注・会衆席のこと〕の間に位置しているもの」であると説明されている<sup>4</sup>。今日も多くの救世軍人 the Salvationist にとって恵の座は大切な祈りの場所であり、そこで捧げる祈りが霊的生活の土台となっている。

本稿では、救世軍における恵の座の実践や歴史を紹介し、その背景となる神学的理解をたどりたい。救世軍に関する歴史的または神学的研究は、近年取り組みが増えつつあるように思われるものの、決して多いとはいえず、とくに日本においては資料の収集・分析の段階からさらなる充実が願われる状態である<sup>5</sup>。本誌のような研鑽の場をいただきながら、今後の実りにつながる

<sup>3</sup> 日本には1895年(明治28年)、イギリスから派遣された士官の一団によって活動が始められた。初期の入隊者の中には、日本人で最初の救世軍士官であり、後の日本救世軍の司令官となった山室軍平(1872-1940)がいる。「平民伝道」を唱える山室の伝道活動、また、廃娼運動に代表されるような、社会福祉の黎明期における諸事業が、日本キリスト史また社会福祉の分野において知られている。

<sup>4</sup> The Salvation Army, *The Salvation Army Year Book 2007, The Salvation Army International Headquarters, London, 2006, p.15.*

<sup>5</sup> たとえば、救世軍の内部における学究的な取り組みとして、Word & Deed (アメリカ)、Journal of Aggressive Christianity (カナダ)、The Practical Theologian (オーストラリア)といった研究誌が発行されるようになった。また、救世軍に所属する者が、研究方法を踏まえて救世軍をその対象とする例が見られるようになった。アメリカのマサチューセッツ州、ゴードン・コンウェル神学校教授ロジャー・J・グリーン Roger J. Green は、ウィリアム・ブース (The life and ministry of William Booth: Founder of the

ものでありたいと願う。

## II. 救世軍における恵の座の実践

### (1) 恵の座の実施

救世軍において恵の座の実践とは、祈りの実践である。それがどのように行われているのか。「聖別会」（日曜日の午前に行われる礼拝、聖潔の恵みを強調した名称になっている）や「救霊会」（伝道集会）など、一般的な礼拝・集会を想定しながら順序を整理すると次のようになる<sup>6</sup>。

---

Salvation Army, Abington Press, 2005.）、カサリン・ブース (Catherine Booth: a biography of the Co-founder of The Salvation Army, Baker Books, 1996.)それぞれについて史料研究を行った。グリーンは、「ステンドグラスの絵や聖人のようにではなく、あるがままを見よう」という意識を持ち、「神が人々をその失敗にもかかわらず用いられる」ということの顕著な事例」として、その人物像また神学を提示しようとしている (Green, Roger J, The life and ministry of William Booth, p.2.）。ケンタッキー州、アズベリー大学教授 R・デビッド・ライトマイヤー R. David Rightmire (Sacraments and The Salvation Army: Pneumatological foundations, Studies in Evangelicalism, No.10, The Scarecrow Press, Inc, 1990.)は、サクラメントに対する救世軍の姿勢について歴史史料を収集、その変遷を整理している。最新のものとしては、アメリカ救世軍の南部歴史センターのディレクターを務めた士官ジョン・G・メリット Major John Merritt による『救世軍歴史事典』 (“Historical Dictionary of The Salvation Army,” Historical Dictionaries of Religious, Philosophies, and Movements, No.68, The Scarecrow Press, Inc, 2006.)がある。救世軍外の立場からは、インターネット書籍検索・販売サイト（アマゾンなど）で調べると、救世軍を主題にした研究書・著書の刊行が年に一、二冊の割合で続いている。

<sup>6</sup> ここでは、救世軍で刊行されている『軍令及び軍律 Orders and Regulations』(いわゆる教会の規則書や信仰生活の指針に相当)を基本としつつ、筆者自身が実際に礼拝・集会で見聞している事例を併せて整理する。『軍令及び軍律』にはいくつかの版があり、内容も変更されている箇所もある。以下が現在日本で翻訳、使用されている版である。

救世軍万国本営、『選ばれて兵士となる 救世軍軍令及び軍律 兵士の巻』、救世軍出版及び供給部、2001年改訂版(初版1979年)

救世軍日本本営、『軍令及び軍律 下士官の巻』、救世軍出版及び供給部、1991年

救世軍万国本営、『軍令及び軍律 士官の巻』、救世軍出版及び供給部、2001年

救世軍万国本営、『軍令及び軍律 小隊士官の巻』、1989年

- ① 説教がなされた後、祈りの時間に移る。説教者、またはその時間を導く役割を与えられた別の士官が、説教壇から会衆に対して信仰の決心を促す。招きの言葉は定められてはいないが、「恵の座は開かれています」、「恵の座に進み出ましょう」といった表現が多い。臨機応変に賛美が捧げられ、祈りが繰り返し勧められる。祈りの内容としては、救いを求める、失った信仰の回復を求める、聖潔の恵みを求める、あるいは神への献身を新たにす、神への感謝と愛を表す等が挙げられる。
- ② 招きに応答する者は席から立ち上がり、説教壇の前に設けられている恵の座に進み出て、ひざまずいて祈る。一人で祈ることもあるが、他の者が寄り添い、信仰上の対話を簡潔に伴いながら共に祈ることも大切にしている。これを「恵の座カウンセリング」と呼び、そのためのガイドダンスを設けている。実際には士官(教職者)や下士官(役職を持った兵士、たとえば恵の座に関連しては新兵軍曹、副新兵軍曹、男女別の恵の座軍曹といった役職がある)がこれにあたることが多いが、兵士(信徒)全般の積極的な奉仕も期待される。
- ③ 会衆からの自発的な応答を待つだけでなく、会衆席の中で決心を思案しているとおぼしき人々に声をかけ、決心を促し、恵の座に進み出るようにと勧めることがある。これを「漁〔すなご〕り」と呼ぶ。
- ④ 礼拝・集会の規模によっては、「記録室 registration room〔近年、カウンセリング・ルームとも称される〕」という場所が用意される。これは恵の座で祈った後、決心した者にとってさらに信仰上の手引きや救世軍への登録手続きが必要と判断される場合に移動して、時間を取るためのものである。

なお、以上の順序は屋内を想定しているが、路傍での伝道(野戦)においても恵の座は開かれ得るものとして認識されている。その際には、恵の座には太鼓や椅子等が用いられ、祈る者はそれらにひざまずいて祈る<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> 救世軍万国本営、『軍令及び軍律 小隊士官の巻』、救世軍出版及び供給部、1989年、

## (2) 恵の座の発展

恵の座の用い方や設備については、時代によって多少の展開が見られる。

初期においては、「恵の座」と並行して「悔い改めの座 **the penitent-form**」という名称があり、むしろそちらの方がよく用いられていた。両者は同じ意味合いで用いられていたが、救いを祈る者について「悔い改めの座」、聖潔を求める者について「恵の座」と使い分ける用法もあったという<sup>8</sup>。これに関連してもう一つ、「聖潔のテーブル **the Holiness Table**」あるいは「祭壇 **the Altar**」と称される設備が存在していた。これは「悔い改めの座」とは別に、会堂の前方に設置されたものであり、聖潔を求める者はこのテーブルの周囲にひざまずいて祈ったという<sup>9</sup>。

これらについてはなお不明な点が多いが、おおよそ次のように推測される。初期の救世軍においては「悔い改めの座」という名称で信仰決心の祈りの場所が設けられ、実践されていた。それは主として救いを求める者たちのために提供された。それに並行して、「聖潔のテーブル」が用意され、聖潔を求める者たちの祈りに用いられた。しかし、その後の経過により「悔い改めの座」と「聖潔のテーブル」の設備は合わせられ、一つの祈りの場所となる例も出

てきた。さらにこれに「恵の座」という名称が用いられるようになり、とくに「悔い改めの座」と「聖潔のテーブル」が一つに合わせられたような場所において、聖潔を求める祈りを意識した際に用いられた。そして現在はむしろ、「恵の座」という名称の下で、救いと聖潔の両方の意味合いを持つ祈りの場所として定着してきたとみることができるだろう。

またイギリスの場合、初期の恵の座は会衆の座席をそのまま用いた簡単なものであったが、**1930**年代には聖句や信仰的文章が彫刻されたニス塗りの台座がしつらえられ、紐で囲まれるようになった。そして、再び簡素な仕様に戻る傾向であったという<sup>10</sup>。現在は、救世軍の活動している国が多岐にわたることから、小隊の建物には恵の座を設けることを必須として、設備上の細目は各国の救世軍の裁量に委ねられている<sup>11</sup>。

## (3) 恵の座の意義

恵の座の実施や発展をみてきたが、今日の救世軍は恵の座にどのような意義を見出しているであろうか。まず、明言されているのは、「その場所自体には何の徳もない」ということであり、恵の座へ進み出る行為は、「聖霊の導きに対する内なる応答の、外に表れたもの」として理解されている<sup>12</sup>。ひざまずくことに、「公のキリスト告白 **a public confession of Christ**」の意義を見るのである<sup>13</sup>。この点を、**1951**年に恵の座に関する論考を表したウィリアム・バローズは次のように説明している。

<sup>10</sup> Coutts, John, *The Salvationists, Mowbrays, London, 1977, p67f.* また、Bovey, N, *op. cit.*, pp.66f, 86–92.も参照。旧版の『軍令及軍律 小隊士官の巻』（1925年版、訳1928年）によれば、恵の座の設備について、「高壇の下に取り付け、圍[かこい]を作り、使用しない時は、太い赤紐で出入りを止めて置く。此の紐は適当な距離に立てられた短かい柱に釣つてあつて、圍ひの内には敷物を敷いて置く」とある（134頁）。ただし日本の事情では、正確な調査は行われていないものの、おおよそ小隊会館はこのようには造られていなかったと思われる。

<sup>11</sup> 『軍令及び軍律 小隊士官の巻』、113頁

<sup>12</sup> 『軍令及び軍律 士官の巻』、92頁

<sup>13</sup> Sandall, *op. cit.*, p.135.

117頁「屋外の集会であっても、いつでも可能な限り恵の座が開かれるべきである。

このような場合、太鼓や椅子や高壇が、この目的のために用いられる。」

<sup>8</sup> 恵の座についての調査・研究を行った英国救世軍の士官 N・ボヴェイによれば、「恵の座」という名称は**1882**年の機関紙『ときのこえ **The War Cry**』の記事に初めて見出されるという (Bovey, Nigel, *The Mercy Seat, The Salvation Army United Kingdom Territory, London, 1996, p.21*).

<sup>9</sup> Sandall, Robert, *The History of The Salvation Army: volume two 1878–1886, The Salvation Army Supplies and Purchasing Department, New York, 1979(reprinted, 1<sup>st</sup> published 1950), p.135.* また、Bovey, Nigel, *ibid*, pp.73–76. 「聖潔のテーブル」については現時点ではなお不明な点が多い。日本の救世軍の建物には見られず、他方、欧米の建物では現在も残っているところもある。英国ポーツマス小隊のある兵士の回想によれば、救世軍がサクラメントを執行しない立場を明確にした**1880**年代まで聖餐桌として用いられていたものが、聖潔のテーブルとして引き継がれたとも言われている (‘Readers’ Letters: Simon Harmer – Table talk,’ *The Salvationist, The Salvation Army United Kingdom Territory, May 4, 2002.*). 救世軍のサクラメント理解および実践との関係もうかがわれる興味深い内容であるが、検証が必要である。

悔い改めの座で最も大切な一歩は、生活の中心を自己から救い主へと転じることです。悔い改めの座にひざまずく時に、最も効果的に処理されるのは、プライドです。このプライド、自尊心は、人類の原罪であって、小さな利己主義者である子供のもつ最初の罪であり、高潔な心の大人が最後までもち続ける弱点なのです<sup>14</sup>。

こうして恵の座は、祈る者の内にキリストに対する信仰をより明らかになさしめ、祈りを助けるものとして尊重され、そのゆえに「神と人との間に重要な和解の起こる場所」、「神と人との間に契約が結ばれる場所」とも言われる<sup>15</sup>。救世軍万国総督（在任 1994—1999 年）であった R・A・レイダー Paul Alexander Rader は次のように述べている。

……救世軍は、恵の座を礼拝と証言の中心に正しく位置付けている。……心を引き裂かれ、もがいてきた者たちは、恵の座において、キリストの主権に身を服し、キリストの死に自らを結び合わせ、キリストの復活の命を経験し、まったく新しい霊的生活の地平に立たせるところの聖潔の恵みに入ることができると私たちは信ずる。……小隊は人々が信仰を養われ、真理によって教えられ、礼拝体験へ導かれ、牧会的ケアを供される所である。恵の座はこれらすべてにおいて、恩寵の場所として重要な役割を持つ。そこでは信仰者が赦し、再生、確信、慰め、新しい勇気、その他多くを見出すからである<sup>16</sup>。……

### Ⅲ. 恵の座の背景

#### (1) ブースとメソジスト

<sup>14</sup> ウィリアム・バローズ、『恵の座』、救世軍出版供給部、2003年（原著1951年）、23頁

<sup>15</sup> 『軍令及び軍律 小隊士官の巻』、113頁、バローズ、同上、5頁

<sup>16</sup> Bovey Nigel, op. cit, ix.

救世軍における恵の座がどのようにして取り入れられたのか、ウィリアム・ブースが救世軍を設立するに至るまでの経緯から、その背景を掘り下げてみたい。

ブースはノッティンガムに生まれ、英国教会で幼児洗礼を受けたが、幼児期は信仰に結びつくことはなかった。十代の頃にウェスレアン・メソジスト教会において信仰を持ち、伝道の志を抱くようになった。ただし、家庭の経済的事情から質屋奉公をし、ロンドンに移り住んで献身の機会を待った。1847年、信徒伝道者として受け入れられたものの、二年後にウェスレアン・メソジスト教会内で起きた分裂事件に関連して誤解を受け、伝道の働きを拒まれてしまったという。そこで、1851年にウェスレー改革派 the Wesleyan Reformers に移り、さらに伝道の機会を求めてメソジスト新派 the Methodist New Connection に移り（1852年）、1854年に同派において任職された。

牧師となったブースは 1855年、ウェスレー改革派に所属していた頃に知り合ったカサリン・マムフォールド（1829—1890年）と結婚、夫婦で精力的な伝道活動を続けた。しかし、ブースは特定の教区・教会に所属しない巡回伝道者としての召命を覚えたものの、それは教団の方針と相容れなかった。そこで 1861年、メソジスト新派からも離れ、単独の巡回伝道者として働くこととなった。数箇所では伝道集会を導いた後、1865年、東ロンドンのスラム街における伝道、さらに救世軍設立へと至った<sup>17</sup>。

ブースはウェスレアン・メソジスト、メソジスト改革派、メソジスト新派と所属を変え、最後にはメソジスト新派からも離れたのだが、それは、何らかの神学的相違というよりは、伝道者としての志を実現したいという実践的な動機によっている。したがって、独立した伝道活動に入った後もブースの基本的な神学はウェスレアン・メソジストの流れを引き継いだものであり、

<sup>17</sup> メソジスト諸派とブースの関わりについては、Shepherd, Victor A., 'From New Connexion Methodist to William Booth,' Papers of the Canadian Methodist Society Historical Society, Vol.9, 1993, pp.91—107. また、Ocheltree, Carolyn, 'Wesleyan Methodist Perceptions of William Booth', Methodist History, 28:4 (July, 1990), pp.262—76.を参照。C・アキルトウリーは、1885年に『メソジスト・タイムズ』によるブースの取材記事を史料として紹介しているが、そこでは「私たちメソジストになにか助言を」という記者の質問に対して「ジョン・ウェスレーに従いなさい、輝かしいジョン・ウェスレーに」と答えている (Ocheltree, Carolyn, ibid, p.273.)。

それが救世軍以降も続いている<sup>18</sup>。

## (2) アメリカのリバイバル運動の感化

しかし、ブースに大きな感化を与えた神学的潮流がなお一つ存在する。それは19世紀のアメリカのリバイバル運動である。

当時のアメリカは、1800年頃から1830年代にかけては第二次大覚醒 **the Second Great Awakenings**、続く1840年から1850年代にかけてはホーリネス運動 **American Holiness Movement** といったリバイバル運動が起きていた。

第二次大覚醒では、西部において開拓移民の救いのために、教派を越えてキャンプ・ミーティングと称する伝道集会が催された。その伝道集会に措いては通常、説教壇の前に「嘆く者の席 **the mourner's bench**」という席が設けられた。それは一種の専用席のようなもので、説教の後、悔い改めの招きに応答した者がそこに席を移動した。(時にそれらの座席は支柱で囲まれており、「祭壇 **the altar**」とも呼ばれた。) そのように祈る者を一箇所に集めることは、実際に祈りを導き、信仰上の助言を与える上でも効果的であるとみなされていた。キャンプ・ミーティングは次第にメソジスト派、バプテスト派が中心となっていったことから、アメリカのメソジスト教会にこの招きの方法が残された。他方、東部では会衆派の伝道者を中心にキリスト者の完全を説くリバイバル運動の流れが生まれた。特にチャールズ・グランドソン・フィニー **Charles Grandison Finney (1792-1875年)** は、自身のリバイバル集会において特別な座席を設置し(切望する者の席 **the anxious seat**)、信仰を表明した会衆を進み出させる手法を用いた。これは賛否両論を生んだが、結果としてその名称と方法が広く伝わることとなった。

<sup>18</sup> 救世軍は、『救世軍の教理』と称する、11ヶ条の信仰告白の文章を持っている。近年刊行された、教理の解説書『わたしたちの信仰』においては、それらがメソジスト新派の教理箇条(1838年版)に由来するものであることが述べられている(救世軍万国本営、『私たちの信仰 救世軍教理ハンドブック』、救世軍出版及び供給部、2000年、171-173頁)。また、ノーマン・H・マーダックによれば、1880年頃の救世軍の軍令及び軍律は、当時のメソジスト教会の規則書や1850-70年代の年会規則に依拠していると指摘している(Murdoch, Norman H, 'Wesleyan influence on William and Catherine Booth,' *Wesleyan Theological Journal*, Vol.20, No.2, Fall, 1985.)。

ホーリネス運動は、メソジスト教会の女性信徒伝道者、フィーベ・パーマー **Phoebe Palmer (1807-1874年)**によるところが大きい。パーマーは1837年、自らの聖化体験を出発点として、「火曜日集会 **Tuesday Meetings for the Promotion of Holiness**」を催すなどして聖化(ホーリネス)を説くようになる。1839年にはニューヨークの組会で最初の女性指導者となり、キャンプ・ミーティングでも説教し、多くの人に感化を与えた。

彼女によれば、キリストは罪の贖いである同時に、私たちがそこにおいて自らを神にまったく献げるところの犠牲である。そして聖書の約束である、キリスト者の完全な清めは、この犠牲としてのキリストに対する信仰において自らを完全に献げる時に、瞬時的に与えられる恵みである。したがって大切なのは、人間が神の約束に応答して、自分を献げるか否かということであるとした(祭壇神学 **altar theology**)。そこで彼女の指導したリバイバル集会においても、説教壇の前が「祭壇 **the altar**」とされ、神への献身の表明として前に進み出るようにと招きが行われた<sup>19</sup>。

ブースが献身し、伝道した時期というのは、ちょうどこれらの神学と実践に立つ伝道者たちが活躍し、またイギリスにおいて伝道旅行を行った時期であった。

## (3) ブースとアメリカのリバイバル運動

ブースとアメリカのリバイバル運動の接点として三名が挙げられる<sup>20</sup>。

第一の人物は、ジェームス・コーウェー **James Caughey (1810-1891年)** である。コーウェーは1930年にニューヨークで回心を経験し、献身してメソジスト監督教会の説教者となった人物である。彼はいく度かイギリス伝道を行ったが、特に第一回伝道(1841-1847年)では20,000人が救われ、

<sup>19</sup> Dieter, Melvin E. *The Holiness Revival of the Nineteenth Century, studies in Evangelicalism No.1*, The Scarecrow Press, Inc., Metuchen, NJ, 1996, pp.23-28. また、Jones, Charles Edwin, 'The Inverted Shadow of Phoebe Palmer,' *Wesleyan Theological Journal*, Vol.31, No.2, Fall 1996. も参照。

<sup>20</sup> Murdoch, Norman H, op. cit., pp.5-20. Green, Roger J, *The life and ministry of William Booth*, pp.16-19 を参照。

9,000 人が聖化の恵みを受けたともいわれる。その際、彼は会衆に信仰の決心を促し、前に進み出て祈るように導く手法を用いた<sup>21</sup>。

ブースは 1846 年 5 月、ノッティンガムのウェスレー・チャペルにおいてコーウェーの伝道に強い感銘を受け、自分も地元のスラム街で有志による伝道を行った。これについてはブース自身の回想が残っている。

「彼はスリリングな逸話と生き生きとした例話で説教を満ちし、また率直に聖書の真理を宣言し、良心に向けて印象的なアピールをなした非凡な説教者であった。……率直で会話的な真理の示し方、人々を決心へと促す理に適った方法、そしてそれらに応じて起こる何百人もの回心した人々、清められた人々の姿は、私の心に消し去り難い印象を残した。……私たちの活動計画は簡素なものだった。小さい家屋を借り、そこで毎晩集会を開いた。天候が良くとも悪くともいつも野外の演説で始め、人々を屋内の別の集会へ招いた。そこで私たちは再び快活な歌を歌い、その場でキリストを信じるようにとの短くも激しい奨励をなした。その決心は部屋の中央に置かれたテーブルの周囲に進み出て、ひざまずくことで表明された。……つまりは、私たちは小規模の救世軍を行っていたのである<sup>22</sup>。」

第二の人物は、フィーベ・パーマーである。1859—1863 年、パーマーが夫婦でイギリス伝道を行った際、イギリスのメソジスト教会の中には女性が公の場で活動することに対する反対から、パーマーに対する強い批判が出された。これを知ったブースの妻カサリンは『婦人宣教論 Female Ministry』(1861 年)を著してパーマーに対する批判に反論し、自らもブースの伝道集会にお

<sup>21</sup> ブースに対するコーウェーの神学的感化については救世軍も認識しており、イギリス救世軍歴史資料センターのインターネット・サイトでもコーウェーについて紹介している。(The Salvation Army Heritage Center, 'Rev. James Caughey: Revival Methods,' <http://www1.salvationarmy.org/heritage.nsf/Categories?openview&RestrictToCategory=People>).

<sup>22</sup> The Salvation Army (under the Generalship of William Booth), *Twenty-one Years Salvation Army*, Salvation Army Book Depot, London, 1886, p.8f.

いて公に説教するようになった。また当時、ブース夫婦はゲーツヘッドで伝道していたが、この間に自分たちも聖潔（聖化）の恵みを体験し、これを積極的に説くことにしたという<sup>23</sup>。パーマーと直接の出会いはないものの、この時の経験がブースと妻カサリンにとって大きな意義を持ったといえることができる。

第三の人物は、チャールズ・グランドソン・フィニーである。フィニーについては、ブース夫妻とも彼が力ある伝道者であると評価し、その著作に親しんでいたようである<sup>24</sup>。

これらの人物との直接的、間接的な出会いから、ブースは、アメリカのリバイバル運動の情熱や伝道方法を受けとめ、自分のものとした。その焦点となったのは「今、この場でキリストを告白する」という明確な信仰告白を導くということであり、それが、悔い改めの座（恵の座）に具体化され、救世軍へと引き継がれていったのである<sup>25</sup>。

<sup>23</sup> マルコム・ベール、『マーチング・オン！——救世軍 その起源と歴史』、救世軍出版及び供給部、2003 年、6 頁

<sup>24</sup> ブースは自身の信徒伝道者の時、仕事を終えると聖書とフィニーの『リバイバル・レクチャー』を読むのを常としていた (Railton, George Scott, General Booth, *The Salvation Army Book Department, London, 1912.*)。また、Ervine, John, *God's Soldier: General William Booth, Vol.1, Macmillan, New York, 1935, pp.363—365.* を参照。J・エルヴィンの脚注によれば、後に救世軍からフィニーの伝記も出版されたともある (p.363)。残念ながら書籍の詳細は確認できていないが、フィニーに対する肯定的な姿勢がうかがえる。

<sup>25</sup> ただし、これはブースがアメリカのリバイバル運動をただ無条件に受け入れ、継承していったという訳ではない。たとえばフィニー以降のリバイバル運動をみると 1860 年代、シカゴ出身の D・L・ムーディー Dwight L. Moody (1837—1899 年) の伝道により、「質問の部屋または集会 inquiry room/meeting」が普及した。集会の会場とは別に部屋を用意しておき、信仰決心をした者は「切望する者の席 anxious seat」に座るのではなく、別室に移動させて祈り、信仰を導くという方法であった。R・サンダルによれば、ブースはこの方法に対しては、恵の座においてその場で神に応答すべきとして、これを採用しなかった。このため、ブースの下から去った者たちがいたという (Sandall, Robert, *The History of The Salvation Army: volume one 1865—1876, The Salvation Army Supplies and Purchasing Department, New York, 1979, reprinted 1st published in 1947, p.70f.*)。その一方で、恵の座において決心した者に対しては、信仰の手引きを行う方法として「記録室 registration room」の設置を許している。

結びの部分では恵みの手段を用いる順序や方法について、次のようにも述べている。

#### IV. 救世軍の霊的生活の基盤としての恵の座

これまで救世軍における恵の座の実践、理解、そこに至るまでの神学的背景をたどった。ブースはメソジストの信仰、また 19 世紀アメリカのリバイバル運動という二つの神学的遺産を受け継いでおり、その神学と実践が救世軍として結実している。そして、両者を結び合わせる焦点として、恵の座は位置している。恵の座は、設備そのものが神聖なもののみならず、また、前に進み出て祈るという人間の行為自体が何らかの信仰的価値を持つとも考えられていない。しかし、恵の座を通して公にキリスト告白することにおいて、キリストのゆえに神に対して自己をまったくあけ渡し、また、キリストのゆえに神が応答して下さることを信じ、神の御業に与る場所として尊重される。それは、イエス・キリストにおいて、旧約聖書で語られるイスラエルの契約の箱の「贖いの座 *mercy seat*」にも似た、神の臨在に触れることであり（参照、出エジプト 25:22; ヘブラ 9:14-15）、あるいはまた、「新しい人」へという神の新しい創造の御業に与ることでもあるといえる（参照、コリント二 4:16; 5:17; エフェソ 4:13, 24; コロサイ 3:10）。このようにして救世軍は恵の座において「救いと聖潔」すなわち、義認と聖化という神の全人的な救いの恵みを見出してきた。

そうしてみると、恵の座に関する今日の救世軍の信仰理解および実践には、「恵みの手段」としてのサクラメントにも通じる、意味合いの深まりを読むことができないだろうかとも考える。しかもウェスレーの神学とは無関係ではなく、何らかのつながりを見出す仕方においてである。

ウェスレーは、説教『恵みの手段』の始めにおいて、「〈恵みの手段〉は、神によって定められた外的なしるし・言葉・行為であり、この目的のために——神が先行的な恵み、義認や聖化の恵みを人に伝達する通例の管となるよう——定められたものと私は理解しています」と述べ、具体的には「祈り」、「聖書の探求」、「聖餐式にあずかること」であるとしている<sup>26</sup>。しかしまた、

けれども、守るべきある特定の順序に関する命令を聖書の中に見いだすことができないように、神の摂理や御霊は、特定の順序に固執しないで、いろいろと変化します。そして、さまざまな人々が導かれる手段や、神の祝福を見出す手段は、それぞれに異なり、無数に異なった方法で手段が入れ替わり、組み合わされます。それでも、依然として私たちの知恵は、神の摂理と神の御霊の導きに従うべきです<sup>27</sup>。

もちろん、このウェスレーの言葉だけをもってして結論を急ぐことはできない。ウェスレー自身が恵みの手段は様々にあり得ると述べつつ、聖餐を大切に守っていったのに対して、救世軍は（その霊的意義は認めているが）洗礼および聖餐のサクラメントを執行しない立場に至った。両者に橋がかけられるにはなお丁寧な研究考察が必要である<sup>28</sup>。

しかしそれでもなお、救世軍人が恵の座においてイエス・キリストが自分の内に、また自分たちと共に生きて下さるという恵みを受け、その恵みに動機付けられて、自ら神の恵みのしるしとしてこの世に遣わされているとの使命を自覚し、具体的な愛の業に生きようと望む姿は、ウェスレーが信じかつ勧めた「完全な人間」の姿と重なってくるのである<sup>29</sup>。

満訳、『ジョン・ウェスレー説教 53』上巻、イムマヌエル総合伝道団教学局、1995 年を用いる。）

<sup>27</sup> 説教 16『恵みの手段』五・3

<sup>28</sup> ボヴェイも、神の恵みの手段として、恵の座とサクラメントの間になんらかの共通性を見ている。ただし、次の点について大きく異なると述べている。①恵の座はいつでも、どこでも開かれ得る。特定の場所・設備・事物が恵みの手段として問題になることはない。②聖餐は信仰者に限定されるが、恵の座はすべての人に開かれる。③聖餐は聖職者による執行を必要とするが、恵の座は神と自分との直接的な関係が基本である (Bovey, op. cit., p.44.)

<sup>29</sup> 参照、ジョン・ウェスレー、『キリスト者の完全に関する平明な解説』、15・四、五（野呂芳男、藤井孝夫訳、『ウェスレー著作集 VII 神学論文・下』、新教出版社、1973 年、330—331 頁）。また、『メソジスト教徒の信念』12・四、五（同書、41—43 頁）。

<sup>26</sup> 説教 16『恵みの手段』二・1（なお、訳文については、竿代忠一、勝間田充夫、藤本

完全である人物……われわれが意味する人物は、彼の中に『キリストにある心が存在している』し、また、そのようにして彼は、『キリストが歩まれたように歩く』のである。……この人物は、今や全人類に立証することができる。『私はキリストと共に十字架にかけられている。それでも、私は生きている。しかし、私ではなく、キリストが私のうちに生きておられるのである。』……彼は、『心のかぎり、彼の神なる主を愛し』、『力の限り』主につかえる。彼は、『隣人を』、すべての人を『自分自身のように』、それどころか、『キリストがわたしたちを』愛されたように愛する。……『そして、言うこと行なうことのすべてを、彼は、主なるイエスのみ名において』、その愛と力において『なす』のである。（『メソジスト教徒の信念』一二・四、五）

この教理の意味するところは、『キリストにあるのと同じ思い』をもち、『彼が歩まれたように歩む』こと、キリストにある思いをことごとく持ち、キリストが歩まれたように常に歩むことである。言葉をかえていうと、内的にも外的にも神にささげること、すなわち、心と生活とをすべてささげることである。（『キリスト者の完全に関する平明な解説』一五・六）

時代によって設備、あるいは前に進み出てひざまずくという具体的な祈りの行為自体も変わるかもしれないが、「恵の座」そのものは、救世軍においては神の恵みを受ける手段、主との親しい交わり **a closer communion with Lord** の場として今後も保持されていくであろう<sup>30</sup>。

神の救いをうめき求めているすべての人のための、確実に一般的な法則はこれです。機会が与えられるときはいつでも、神が定められたあらゆる

る手段を用いることです。なぜなら、あなたに救いをもたらす恵みを携えて神があなたに出会ってくださる手段を特定することはできないからです<sup>31</sup>。

（救世軍西新井小隊 士官〔牧師〕）

<sup>30</sup> 救世軍のサクラメント理解と恵の座の関係、また救世軍の恵の座理解や実践がウェスレーの神学、メソジストの神学にさかのぼって考えた時にどのように位置付けられるか、あるいは「恵の座」という言葉を信仰と実践において持っている他の教会教派とどのような共通点、相違点があるのか等、今後の取り組みが望まれる点として記しておきたい。

<sup>31</sup> 説教 16『恵みの手段』五・3